



Established in 1992

JCPF会報

Japanese Cleft Palate Foundation
 特定非営利活動法人 日本口唇口蓋裂協会

発行 特定非営利活動法人 日本口唇口蓋裂協会事務局
 〒464-8651 名古屋市千種区末盛通2-11
 愛知学院大学歯学部
 TEL: 052(757)4312 FAX: 052(757)4465
 振込口座: 郵便局 00850-1-109941
 三菱東京UFJ銀行覚王山支店 普通 1045666
<http://jcpf.agu.jp> E-mail: jcpf@jcpf.or.jp

Vol. 22, No. 3
 (平成25年12月20日発行)

71

定価 400円

Van der Woude症候群

愛知学院大学歯学部 口腔先天異常学研究室
 大野 磨弥 先生

口唇・口蓋裂は日本ではおよそ500-700人にひとりの頻度で出現する先天異常であり、最も多くみられる先天奇形の1つです。口唇・口蓋裂を併発する症候群は400以上あるといわれていますが、その中で、Van der Woude症候群は、最も一般的な症候群です。Van der Woude症候群とは、口唇裂および口蓋裂に下口唇に先天性瘻孔を主症状とする症例であり、口唇・口蓋裂患者の約2%でみられ、発生頻度としては、出生児数の75,000人から100,000人に1人であり比較的まれであると言われていています。先天性下口唇瘻の一般的な性状として、赤唇部に左右対称に2個存在するものが多く、まれに正中、片側性に1個のみ位置する場合があります。瘻孔の開口部は隆起しているだけのもの、唾液腺が存在しておりだ液を分泌するものなど一定ではありません。

口唇口蓋裂は遺伝疾患であることはよく知られていますが、Van der Woude症候群も同様に遺伝疾患であり、常染色体優性遺伝形式をとり、原因遺伝子はIRF6であるということもわかっています。これは、単一遺伝子疾患として受け継がれる場合もありますが、大部分は家系内で散発性に発生することが多く認められます。Van der Woude症候群自体、表現型は多様であり、口唇口蓋裂+先天性下口唇瘻を主症状としますが、中には先天性下口唇瘻のみであったり、粘膜下口蓋裂、歯牙欠損、部分合趾を副症状として呈します。そのため、軽度な症状の場合、見逃されることもあり、患者の両親にこのような症状がないか確認することが重要であるとともに、遺伝子診断による確定診断や遺伝カウンセリングによって遺伝に関する情報を正確に理解することも重要となってきます。

先天性下口唇瘻は、口蓋形成術時や口唇修正術の際に同時に瘻孔切除術を行います。その後は、一般的な口唇口蓋裂の一貫治療と同様の治療予定となります。



Q & A コーナー

質問：口腔前庭形成はどんな手術ですか？なぜ必要ですか？

お答え：東京歯科大学 オーラルメディスン・口腔外科学講座
澁井 武夫 先生

口腔前庭とは「唇」と「歯」の間の空間のことを指す言葉であり通常は唇をめくることができるぐらいの余裕がありますが、両側性唇裂の患者さんは生まれながらにこの空間が狭いことがあります。特に唇の手術後にはそれが顕著となることも多く、そのまま放置した場合には上唇の運動が妨げられる要因となります。さらに重度の場合には唇がうまくめくれないために、ハミガキ時にハブラシがうまく入らないことがあり、ムシ菌の原因にもなってしまいます。また歯科矯正治療を行う際には矯正装置を取り付けることができない場合などがあります。そのようなときに行う手術が「口腔前庭拡張術」です。

図1は上顎前歯の歯ぐきの粘膜が短く緊張が強い例です。手術はその緊張が強い部分に沿って切開を入れ(図2)、粘膜をはがして上方に移動させ口腔前庭が十分に拡大された事を確認します(図3)。生じた粘膜上皮欠損部には粘膜移植を行いますので、そのための粘膜を採取します。今回は頬粘膜の採取です。まず採取する大きさを決め(図4)粘膜を採取します。採取した部位は縫合閉鎖し(図5)、採取した粘膜は上皮欠損部に移植し縫合固定を行います(図6)。最後に移植片の安定のためにプラスチック製のカバーを口腔前庭に固定することもあります。このような手術を行うことによって狭かった口腔前庭を広げることが可能となります。口腔前庭拡張術の一例を示しました。



図1



図2

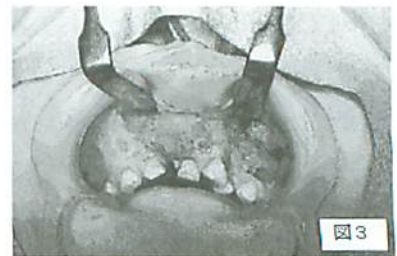


図3



図4



図5

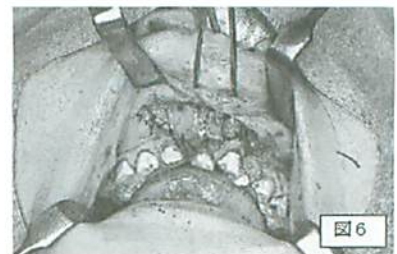


図6

医学部における学生教育と国際ボランティア経験

大分大学名誉教授 大分岡病院名誉院長 柳澤 繁孝 先生

2002年に初めてベンチエのミッションに参加した。戦争終結から27年余、省都とはいえ街灯はまばらで、舗装道路は幹線部、高い建物は我々の宿舎(旧省政府のゲストハウス)と行政府と病院とほんの一部、道路には自転車と家族いっぱい乗せたバイク、少ない商品と暗い店内など、おぼろげな記憶となった日本の戦後の光景であった。郊外に出ると裸足同然の貧しい人たち、やしの家、井戸や水道の無い家、電気すらない家もあった。現地の貧しさに衝撃をうけ、一方、人々の明るさと力強さに救われ、この人達に役立つことをしたいと思った。医療に携わっていて良かったとも思った。

貧困は医療を遠ざける。私は医療者にはこの認識が欠くべからざるものと思っている。今の日本では国民皆保険のもとで医療を受けることができ、貧困と医療の問題を実感する機会は幸い少ない。そのため、このような場を教室員に経験させ、社会と医療とりわけ医療の目指すところを肌で感じてほしいと思った。これには感性の豊かな学生を経験させたいと考えた。しかし、学生には授業、経費、安全性と活動内容など新たな課題があった。

本学は学生研修の一環として、マニラ市内の病院での熱帯感染症プログラムがあり、学生の国際活動への参加のハードルは高くはないことが予想できた。

また、2005年の5月に大分大学へのベンチエ省知事とグエンデンチュエ病院長の来訪を境にこのミッションに対する理解が深くなった。

ボランティア活動に関する講演会を2005年、2006年に子供ゆめ基金講演会として大分大学の大学祭に合わせて開催した。このような状況が学生参加への下支えになったものと思う。2005年の12月から医学部長、学長のご理解により学生派遣の見通しがたった。

ミッションは口腔外科医、麻酔医、小児科医、看護師と活動を支える管理・事務職からなる。特徴として患者には治療を、参加者には技術交流の二面があり、手術の名手達のライブ手術を時間の限り体験できる得難い機会でもある。しかし、学生をどのように配置するか、明確な方針をもてないまま、活動がはじまる。悩むまでもないことがわかった。手術室の設営、診察準備・整理から手術助手まで臨床実習以上のことを何でも、臨機応変に、求められるままに活動することとした。

医学部では従来からチュートリアル教育を採用しており、課題の検討・解決と自立的な学習の教育を目指している、このような活動に対応できるバックグラウンドがあったものと考ええる。

学生たちの感想文の一部を紹介する。

1年生で参加した学生は、私が何よりも重視したことは、笑顔でいるということであった。意識して笑顔は絶やさないようにした。手術のことで患者さんと家族の方は大きな不安がある。その上、私たちは外国人である。その不安感をなくすことはできなくても、笑顔で和らげることにつながればと思い行動した。挨拶はベトナム語を心掛けた。笑顔でいることは、医療チームに与える影響も大きいと考えた。それが全体の和を作っていると感じた。最終的には患者さんにつながるのである。すべての隊員の方たちがこのことを実践していたように思われる。

私達学生の仕事は主に記録のための写真撮影、血圧測定、手術機材の準備等であった。何か役に立っているということがとても嬉しく、毎日が勉強の連続であり刺激的な日々であった。短い期間であったが、価値観や考え方が変わるくらいのすばらしい毎日であった。最も心打たれたのは、患児と看護師さんの一言であった。術後の痛みのなかで、私が話しかけると笑顔で「ありがとう。」と喋ってくれた。その事を看護師さんに話すと「これからあの子は幸せになれるね。」と。私は感動せずにはいられなかった。こんな私でも一人の女の子の人生に関係することができて、その子が幸せになるための手伝いができた。

このミッションへ参加をよびかけるポスターを見た時、すかさず応募した。手術を希望する患者さんとご家族は、さまざまな思いや夢、希望を託して病院へ来られていた。患者さんとご家族の生活が変わる瞬間を体験した。術後の回診時、患者さんにお会いすることでそれを実感した。先生は、「医療とは患者さんをサポートするものである」ということをおっしゃった。医療従事者の謙虚な心、医療のあるべき姿を感じた。

国際的に行われている看護とは何か知りたい、そこにどんな人が、どんな思いをもって集っているのかを知りたい、現地の人がどのように援助を受け、どのような成果があるのかを知りたい。自分の目で確かめ、看護師としてどのように医療に関わっていくか考えたいと思ったためである。また、国際的に活躍している方々にミッションに参加したいきさつや理由を聞いてみた。一人の方から、「ただ、私がお役に立つのであれば役立たせてくださいと思うだけです」という答えが返ってきた。難しい国際事情や政治情勢、貧困問題などを織り交ぜた考えが返ってくるのではないかと予想していた私には、あまりにも率直で簡潔な答えで意外に思えた。本質を語っている言葉で、非常に心を揺さぶられた。そのような医療者に会えて幸せだと思った。国際看護を行うものとして必要なことは、エネルギーと精神力、周りを思いやる強さ、そしてなにより、人が好きで、人の役に立ちたいという謙虚なおもいであると思った。今までは、ただの「国際的な場で活躍している医療者たちへの憧れ」であった。しかし国際看護を行うためには何が必要であるのかを感じる事ができ、その憧れが具体的な夢になり、今後何を学ぶかという目標を持つことができた。

これまでの医学科学生8名、看護科学生6名、福祉、経済と工学部学生各1名が活動した。既に医師・看護師として医療の現場で、またそれ以外でもそれぞれの活躍の場でこの経験が活かしていることを願います。

協会事務局より 歯科医師が中心として行っているこのボランティアが医師や看護師などを旨とする学生教育に役立っています。これも日本口腔蓋裂協会の貴金属リサイクルに協力していただいている先生方のご厚情の賜物でございます。衷心よりお礼申し上げます。

※本記事はデンタルタイムス21に掲載されたものを、歯科時報新社様の許可を得て掲載しています

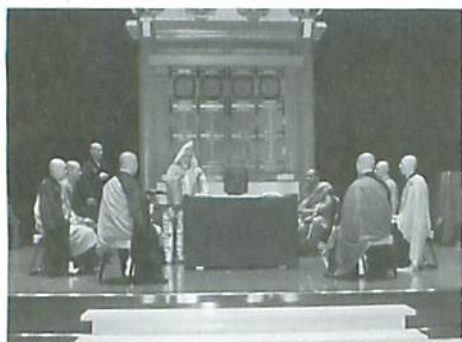
最近の国内活動

■たんぼぼ会合宿

2013年8月17日18日の両日に、毎年開催されております、たんぼぼ会、夏の合宿が三重県津市で開催されました。今年も多くの方々が参加されておられました。また、今年も、愛知学院大学歯学部附属病院口唇口蓋裂センターの藤原久美子先生、加藤大貴先生も参加され、子供たちへの磨き残しの染め出しとブラッシング指導をしていただきました。

■ラオス人民民主共和国チャンバサック県のワットブーへ仏頭返還

愛知学院内に開設している在名古屋ラオス人民民主共和国名誉領事館にきた一通の手紙が発端になり、ある骨董商の方が預かっていたラオス国の仏頭にまつわる不思議な出来事が縁で、平成25年9月6日(金)に東京港区にある曹洞宗大本山永平寺別院 長谷寺において仏頭返還式が執り行われました。ラオス国からは、チャンバサック県の副知事やワットブーの僧侶はじめ要人12名と駐日ラオス大使館からは特命全権大使ら関係者10名外務省からはラオス担当の光本政彦様、仏頭の寄進者の鈴木雅恵様とその関係者5名、そして協会相談役である小出忠孝名誉領事、夏目長門常務理事、スタッフの山田恭子の総勢31名が参加し、長谷寺の僧侶の皆様にご読経をしていただき無事にラオス国へ返還する運びとなりました。副知事からも返還ができたお礼とこれからも両国の発展のために協力を要請するご挨拶がありました。



返還される仏頭(中央)



チャンバサック県副知事



ラオスからの僧侶と小出忠孝名誉領事



返還式典参加者

■モンゴル母子病院院長御一行来名

9月11日(水)～9月15日(日)の日程でモンゴル母子病院エンクツル・シヨンクーズ院長、アデヤスレン・ジャミンジヤブ小児歯科部門長、オユンチメグ・ウンシバヤル遺伝子研究室長、エンクゾル・マルチンフン医師の4名がモンゴルから来名しました。愛知学院大学において疫学研究に関し夏目長門教授、藤原久美子講師、加藤大貴非常勤助教と研究会議を行い、名古屋市立西部医療センター及びあいち小児保健医療総合センターを視察しました。また、9月14日(土)には、愛知学院大学とモンゴル母子病院においてモンゴル国における先天異常に関する疫学研究を共同で行うための協定の調印を行いました。

■マスード・ビン・モメン駐日バングラデシュ人民共和国大使 在名古屋名誉領事推薦候補者と初面会

9月16日(月・祝)マスード・ビン・モメン駐日バングラデシュ人民共和国大使が、在名古屋名誉領事推薦候補者との面談のため来名されました。

今年に入り、予てより医療援助を行っており友好関係にあるバングラデシュ国のモメン大使より、愛知県への名誉領事館再開設にあたり、名誉領事館開設や名誉領事の候補者推薦を携わっている当協会へ名誉領事の候補者推薦の依頼があり、このたび愛知県を代表する企業の一つである三菱航空機株式会社の江川豪雄取締役会長を推薦させて頂きました。今回、モメン大使と江川会長は初めての面談となりましたが、すぐに意気投合し今後の両国における友好関係や可能性等についてお話をされました。

現在、来春の開設を目標に、両者にて確り進めております。

■日本ベトナム友好年記念事業

今年、ベトナムと日本の国交関係樹立40周年の年で、各地で様々なイベントが開催されています。私供協会も日本医学歯学情報機構がベトナムのハノイで開催する記念イベント「医学歯学交流ワークショップ」のサポートを行っていますが、平成25年9月20日(金)～21日(土)に行われました愛知県が主催する記念事業に夏目長門常務理事はじめスタッフが参加いたしました。20日のウィルあいちで開かれたベトナムアンサンブルコンサートでは、大村秀章愛知県知事のご挨拶の後、ベトナムボンセン国立劇場所属舞踊団による歌や舞踊、伝統楽器の演奏が披露されました。ベトナムのモデルにより伝統衣装であるアオザイのファッションショーも行われるなどいろいろなベトナムを堪能することができました。21日には名古屋の繁華街である久屋大通公園の久屋広場でベトナムフェスティバルin愛知のオープニングセレモニーが、午後からは、名古屋観光ホテルにて記念レセプションが行われ、愛知とベトナムの友好交流がありました。経済成長著しいベトナムの活気が顕著に感じられるイベントとなりました。これからますますの友好関係の発展を期待いたします。



■ラオス人民民主共和国名誉領事会議開催

平成25年9月26日(木)にケントン・ヌアンタシン特命全権大使のお声掛けで駐日ラオス人民民主共和国大使館にて名誉領事会議が行われました。小出忠孝在名古屋名誉領事、大野嘉宏在京都名誉領事、中島幸一在福岡名誉領事、岩政輝男在沖縄名誉領事と各名誉領事館事務局が集まり、大使館の皆様とともにこれまでの名誉領事館の活動の報告と今後の展望について話し合いをいたしました。それぞれの名誉領事館がその特色を生かした活動を行っており、少しでもラオス国を日本に周知し、より一層の友好関係を築くために努力をしています。ケントン大使も名誉領事の活動に大変感謝され、今後の展望についての意見を踏まえ、2015年の日本・ラオス国交樹立60周年記念にイベントの開催を是非行いと述べ、名誉領事に協力を求めました。私供からは、現在活動している寄附金機能付自動販売機の設置を各名誉領事にお願ひし、ラオスへの寄附を募るべく、協力を要請いたしました。各名誉領事が、それぞれの活動報告を知ることができ、会議後には大使館員の皆様とラオスの伝統料理をいただきながら交流を深め、終始和やかに実りある会議となりました。

■入れ歯供養祭

第28回入れ歯供養祭が平成25年10月8日(火)に愛知県保険医協会歯科部会の主催で覚王山の日泰寺にて開催されました。40名近い参加者を前に、僧侶がこれまでに身体の一部として役割を果たしてきた入れ歯や歯牙を供養してくださいました。ご供養の後には、代表して河合幹協会顧問(愛知学院大学名誉教授)のご挨拶や歯に関する講話などがありました。恒例になりましたが、保険医協会のご厚意により協会の活動を示すパネルも展示させていただき、医療援助活動を皆様へ周知することができました。供養された入れ歯や歯牙の金属部分はリサイクルし、一部協会にご寄附いただくことになっています。この場を借りて、毎年のご寄附に感謝申し上げます。



平成25年度 安部浩平初代日本口唇口蓋裂協会理事長記念寄附講座 — 口腔先天異常遺伝学・言語学講座 — 講演会のご報告

平成25年度 愛知学院大学寄附講座講演会 口腔先天異常遺伝学・言語学講座が9月6日(金)に愛知学院大学歯学部附属病院にて行われました。今回の講師の先生は、藤田保健衛生大学形成外科にて頭蓋顎顔面領域の様々な先天異常の治療に当たられている、形成外科医の奥本隆行准教授でした。「われわれが取り組んでいる口腔先天異常を中心とした頭蓋顎顔面外科治療～機能と整容の両立を目指して～」をテーマにご講演下さいました。

頭蓋顎顔面領域の先天異常には口唇口蓋裂や鰓弓発生由来の先天異常など、比較的まれな顔面裂や頭蓋縫合早期癒合症に関連した中顔面の異常を伴う症候群(頭蓋顎顔面異骨症)などがあります。

奥本先生は上記疾患に対し治療計画を立案する際には機能面と整容面の両立が究極の目標であり、特に口腔領域では咀嚼、嚥下などの摂食機能や構音機能の獲得、さらには呼吸のための十分な上気道確保が求められること。また、整容面では元の特徴をできる限り消し去る事が理想であるとお話し下さいました。

さらに、奥本先生は形成外科の医師でありながら、咬合についても大変重要視されておられ、成長の過程において安定した咬合を得る事が重要であり、安定した咬合の完成度が以後の治療の成否を決めるとのお話しは、治療を担当する上で自分の職域以外の職種の治療に関しても十分理解をして行う必要がある事を再認識させられました。

今回の講演会には、先天異常を担当する歯科医師、言語聴覚士の他、若手の歯科医師、歯学部の学生、言語聴覚学を専攻する学生などにご参加頂きました。講演後に講師の奥本先生へ活発に質問が出されました。

限られた時間の中で様々な職種に有用かつ臨床に直結した内容をご講演頂きました。そして、ご参加下さった方々が、今後の臨床に役立てていただき患者様により良い治療を受けていただく糧となれば、企画者としては有り難い限りです。

今後も引き続き頭蓋顎顔面領域の先天異常に関わる日本の方々へ情報発信をしていきたいと思っております。

平成25年度 安部浩平初代日本口唇口蓋裂協会理事長記念寄附講座 — 口腔先天異常遺伝学・言語学講座 — 講演会のご案内

第4回

日 時：平成26年2月13日(木) 午後4時30分開場
テ ー マ：顎顔面の発生について(仮題)
講 師：井関 祥子 先生(東京医科歯科大学 医学歯学研究科 教授)
開催場所：愛知学院大学歯学部 楠本キャンパス 歯学部第二会議室
参加費：無料

【お申し込み方法】 お名前、ご連絡先を記載の上、FAXまたはEメールにてお申込み下さい。

FAX：052-759-2151 E-mail：osakabe@dpc.agu.ac.jp

寄附講座係まで。

新規法人会員のご紹介 ご入会頂きありがとうございます

◆法人正会員

医療法人 生生会
愛豊歯科医師会 東郷支部
医療法人 につた歯科
医療法人 葵鐘会

◆法人賛助会員

医療法人 瑞翔会 浅見矯正歯科クリニック
丸糸株式会社

[会報担当：鈴木・岩田]